公益財団法人日本文化藝術財団　「創造する伝統賞」過去の受賞者
＜美術・工芸＞

2009年度 受賞

イサ トシヒコ
伊砂 利彦

【肩書き】型絵染め作家 / 図案家

【分　野】染色

師である陶芸家・富本憲吉の『模様から模様を創らず』の言葉を守り、自然を写生し、音楽を感じ独特のモチーフを創りだし、制約の多い型絵染で多くの作品を制作し続けている。代表作は『ドビュッシー前奏曲Ⅰ、Ⅱ』24曲のイメージや6帖大の和紙で染めた『月 四部作』がある。

（2010年3月15日逝去）
亡くなったあと、アトリエを利用し、以前仕事に使っていた「伊砂工房」の名前で、長女渡邊ルリ子を中心に次女竹村由美子とスタッフで工房を立ち上げ、教室やイベントを開催している。

【選評】伝統的な型染め手法を用いて、新しいモダンなスタイルを確立した。大きな賞の受賞歴が無く、高齢ではあるが、人間国宝のような日本国が認定する分野にも該当しない為、当財団の賞に相応しい。

2009年度 受賞

ミヤナガ アイコ
宮永 愛子

【肩書き】美術家

【分　野】現代美術

日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。

【選評】まさにクラフトと現代美術との接点に位置する活動として注目される。オブジェ的な発想をインスタレーションとして展開する方法のユニークさも極めて注目される。

2010年度 受賞

シマブク ミチヒロ
島袋 道浩

【肩書き】現代美術作家

【分　野】現代美術

1990年代初頭より世界中多くの場所を旅しながら、そこに生きる人々の生活や文化、新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンスやインスタレーション作品などを制作している。

【選評】世界各地を旅しながら、それぞれの地域社会のコミュニティの人々と交流し、地域の文化的な伝統をリサーチした結果を自らのファンタジーと一体化させたユニークなプロジェクトを展開し続けているアーティストである。
氏の活動は、作品として結果を提示することではなく、関わった地域の文化の発掘、現代における伝統の継承をも視野に入れて、地域とコミュニケーションを図るプロセスの中で活動を展開している。海外においてこのような活動を展開することは非常に独創的であり、地球的規模で、日常の生活の中から本質的な伝統を再創造している点を評価した。

2010年度 受賞

ショウジ サトル
庄司 達

【肩書き】造形作家

【分　野】彫刻

1939年に生まれ。京都市美術大学専攻科彫刻専攻修了。名古屋市工芸高校にて教員となる。1969年布による空間をテーマに個展デビュー。以降、布や糸を主体に、木材や竹材を加えたインスタレーションの造形発表を続ける。

【選評】極めて伝統的な素材である布の質感と独特の性質を現代美術の造形素材として抽出し、空間表現を行なってきた作家である。布の垂れる・伸びる・張り詰めるなどの性質と設置される空間との緊張関係にそれまでにない、新しい感情を現代美術の世界に持ち込んだ業績は大きい。近年では、それ自身では自立できない布に対して、全く逆の性質を持つ竹を素材として布と併用して用いることによって、新しい空間表現を作り出している。

2011年度 受賞

オカダ シュウジ
岡田 修二

【肩書き】画家

【分　野】絵画

1959年生まれ。1987年愛知県立芸術大学大学院修了。2007年京都市立芸術大学大学院博士（後期）課程修了。博士（美術）。VOCA展'98にて奨励賞。滋賀県立近代美術館、大原美術館にて大規模な個展、セゾン現代美術館 ART TODAY 2009にて２人展を開催。

【選評】岡田修二氏は独自の視点をもったリアリズムの手法で注目されてきたが、近年、集中 的に制作されている《水辺》シリーズは、琵琶湖の水辺や沼などをモチーフにしたもので、対象を客体視するのではなく、シンクロし一体化した眼差しのありようや、その背景をなす自然観において、東洋的、日本的な思想に深く依拠していると思われる。氏が切り開いた新たな具象絵画の可能性と、文化的な伝統を再解釈し蘇生させる画家としての姿勢を高く評価し、「創造する伝統賞」に選考する次第である。

2012年度 受賞

オオタ サブロウ
太田 三郎

【肩書き】美術家

【分　野】現代芸術

1950年山形県生まれ。植物の種子や戦争を題材を得た切手作品など、郵便を素材として「時間」と「場所」の関係性をテーマに制作。全国各地でワークショップを開催。2000年CCGA現代グラフィックアートセンターと西宮市大谷記念美術館で個展。2008年大原美術館で「HIROSHIMA1990-2008」「平成20年春の有隣荘特別公開 有隣荘・太田三郎・大原美術館」、山形美術館で個展「太田三郎－日々」を開催。国内外の画廊や美術館で作品を発表。

【選評】太田三郎氏は1984年に切手と消印による作品を発表して以来、今日まで一貫して切 手の体裁をとったシリーズを展開し続けてきた。1987年に始まる同氏のオリジナルの切手は植物の種子、太平洋戦争の犠牲者たちの写真などをモチーフにしているが、小さなユニットを反復させたそのシート状のイメージは、時代を越えたメッセージとして私たちに生命、場所、記憶への思索を深く喚起させずにはおかない。長年の間、誰もが日常的に親しんできた切手という伝達のためのツールを独自に捉え直すことで、改めて社会にとっての普遍的な問題を提起しようとする太田氏の真摯な持続する志を高く評価し、「創造する伝統賞」に選考する次第である。

2012年度 受賞

オグラノリヒコ
小椋 範彦

【肩書き】漆芸作家 / 東京藝術大学美術学部准教授

【分　野】工芸

1958年岡山県生まれ。1983年東京藝術大学卒業制作サロン・ド・プランタン受賞。1985年重要無形文化財保持者、田口喜国のもとで制作助手を務める（〜98)、2011年紫綬褒章受章、2012年第18回MOA岡田茂吉賞展MOA美術館賞他多数受賞。国内外の展覧会に出品し、評価を得ている。

【選評】小椋範彦氏は日本を代表する工芸技法の一つである蒔絵の作家である。蒔絵は戦後、松田権六や田口義国といった先達の作家の築き上げた地平の上に立って、さらにそれを新しい高みへと導いた。彼の作り出す文様は、精細な自然の写生に基づき、それを文様化する過程で、独特の様式と色彩を付与される。それはきわめてリアルな表現の中に螺鈿特有の光を通した色彩やこれまでになかったような種類のパステル調ともいうべき色彩の採用することによって、リアルでありながら、あるいはリアルなままで幻想性をまとうようになった、ということができる。小椋氏の登場によって蒔絵表現がこれまでにない新しい相貌を持つように導いた功績を評価し、「創造する伝統賞」に選考する次第である。

2013年度 受賞

ミセ ナツノスケ
三瀬 夏之介

【肩書き】美術家 / 東北芸術工科大学教授

【分　野】日本画

1973年奈良に生まれる。1999年京都市市立芸術大学 大学院修了。2006年五島記念文化賞　美術新人賞。2009年VOCA展VOCA賞。現在東北芸術工科大学教授。

【選評】三瀬夏之介氏は三重県に生まれ育ち京都で日本画を学ぶという歴史と伝統の中で表現者としての自己形成をした画家であり、日本画のさまざまな技法を駆使した豪壮な画面に現代的なテーマを織り込むという独自の世界が高く評価されてきた。五年前からは東北に拠点を移し、東北芸術工科大学で教鞭を取りながら学生たちと共に地域の文化風土に根差した「東北画」と称する絵画のあり方を探究してきており、また東日本大震災以降はより密接に東北という場所に結び付いた美術の可能性を切り開くことを目ざしている。三瀬氏の画家としての卓越した資質と伝統への理解の深さ、そして今日的な挑戦を高く評価し、創造する伝統賞の受賞者に選考する次第である。

2014年度 受賞

マエダ マサヒロ
前田 正博

【肩書き】陶芸家／日本工芸会東日本支部幹事長

【分　野】陶芸

1948年京都府生まれ。東京藝術大学大学院修了。2009年第56回日本伝統工芸展日本工芸会総裁賞受賞。2010年第17回MOA岡田茂吉賞展MOA美術館賞受賞。2011年日本陶磁協会賞受賞。国内外の展覧会・パブリックコレクション多数。笠間陶芸大学校顧問、日本工芸会常任理事。

【選評】前田正博氏はもともと多種の色彩が乱舞する奔放な表現を追求してきたが、ここ数年、銀色を基本に据え、部分的に黒を線条的に加える色彩表現に大きく転換した。微細な縦と横の銀線描を、間にマスキングと焼成を挟んで何度も繰り返すもので、マットな質感とモノトーンの色感の支配するとてもモダンな表現である。それはまた同時に、磁器土を削って得られる極めて幾何学的な規矩のきっぱりとした形にも支えられていることは見逃せない。色彩、質感、形の三者が見事に融合した新しい器表現は、伝統と現代のびやかな共存をいかに創出するかという陶芸ないし工芸に与えられたこれからの課題に大きな示唆を与えるものとして高く評価される。

2014年度 受賞

ヨシダ ナオシ
吉田 直

【肩書き】彫刻家

【分　野】彫刻

1969年横浜生まれ。1995年東京芸術大学大学院・保存修復技術彫刻専攻修了。日本の伝統技法「寄木造り」を駆使し、逞しい男性像や清楚でありながら微やかなエロスを感じさせる女性像なそ、現代に生きる人々を木彫彩色像によって制作している。2003年あさご芸術の森大賞展優秀賞授賞。岩崎ミュージアムほか国内外で作品を発表。

【選評】吉田直氏の彫刻は、仏像などに使われてきた伝統的な「寄せ木造り」によっている。それは、東京藝術大学で保存修復技術彫刻を専攻したことによるのだろう。現代彫刻を、寄せ木造りによってつくる作家は、ほとんどいないのではないかと思われる。
伝統的な木彫技法によって、吉田氏は、現代を生きる人々の日常的な姿、何気ない身振りを、主な主題にしている。彩色されたその写実的表現は、今日では繊維強化プラスチックなどの素材による方が一般的だと思われる。しかし、木彫のノミの痕跡が、実に深い味わいを生んでいる。伝統技法によって現代のポップな表現を生み出した吉田氏の作品は、「創造する伝統賞」にふさわしいものである。

2015年度 受賞

スダ ヨシヒロ
須田 悦弘

【肩書き】美術家

1969年山梨県生まれ。本物の植物のような精巧な彫刻作品を、展示室や建物の片隅に忍ばせ、空間も含んで作品とするインスタレーションを展開。1993年「銀座雑草論」。2012年シドニー・ビエンナーレ、2014年カルタヘナ・ビエンナーレなど多くの国際展に選出。
その他国内外で展示、パブリックコレクション多数。多摩美術大学彫刻学科客員教授。

【選評】須田悦弘の作品はすべて花卉類である。その特徴は何よりも本物と見紛うほどのリアルさ、そして作品の置かれる空間の特殊さである。花卉は木彫で制作され彩色を施される。それを展示施設内の空間や古建築の片隅、あるいは特別に作られた展示のための建屋内に設置される。設置位置は人間が歩行する際の通常の視覚の範囲から少しずれていることが多く、鑑賞者は気が付いてハッとしたり、見逃してもう一度見直したりする。極めて精緻な技法で制作された作品は柔らかく品格高い印象を与え、広い空間の中に小さく静謐な佇まいで存在している。花卉が一瞬にして無機質な空間に与える輝き。このインパクトが新しい現代美術の表現として大きく評価される。

2016年度 受賞

カザマ サチコ
風間 サチコ

【肩書き】美術家

【分　野】現代美術

東京都生まれ。1996年武蔵野美術学園版画研究科修了。現在起きている現象の根源を過去に探り、未来に垂れこむ暗雲を予兆させる黒い木版画を中心に制作する。近年の主な展覧会に「六本木クロッシング2013展:アウト・オブ・ダウト」（森美術館/2013年）、「魅惑のニッポン木版画」（横浜美術館/2014年）、「2015 Asian Art Bienniale」（国立台湾美術館/2015年）「11th Gwangju Biennale」（韓国 光州市ビエンナーレホール）など。

【選評】表現に係る制作では、今まで「伝統とは」を問う姿勢が見られる作品が伝統芸術として残ってきた。美術が芸術に格上げされるには、素材・技法ともに歴史性を課題としながら、制作者が生きる時代への批評性を備えている必要がある。
風間サチコ氏の作品は、和紙に木版という伝統的な素材と技法を継承しながら、現代社会の状況と矛盾を風刺的に表している。それらは新しい想像力と感性の展開を社会に対して投げかけている。然も版のスケールは従来のサイズを越えており、刷られる枚数は少なく、オリジナル性を重要視する現代美術として成立している。「創造する伝統」のコンセプトに適う、500年後の人類に残したい作品であり、今後さらなる期待ができる作家である。（山本豊津）

2016年度 受賞

ミツタ ハルオ
満田 晴穂

【肩書き】自在置物作家

【分　野】金工ー自在置物

鳥取県米子市に生まれる。平成20年東京藝術大学美術研究科修士課程彫金研究室修了。生来の虫好きから、在学中より制作していた自在置物が、21年の本格的なデビュー展より多方面から注目を集める。22年よりラディウム（東京）と日本橋三越にて毎年の個展。「巧術」シリーズ展（スパイラルガーデン他）毎回出展。「六本木クロッシング2013」（森美術館）を皮切りに、美術館でのグループ展にも参加。

【選評】自在置物は、金属を素材に動物や昆虫などの生き物をモチーフとして写実性を追求した金工作品で、その関節までもつくり込むことで自在に動かすことができる。江戸時代中期に甲冑師の一派が生み出し、明治時代には海外において高い評価を得たが、その後はほとんど忘れ去られ、技も失われつつある。
満田晴穂氏は、その技を受け継ぎつつ、既成の枠組みにとらわれない自由な発想のもと、現在（いま）の時代に相応しい新たな造形の展開にも取り組んでいる若手の作家である。作品には、生き物がそこに実在しているかのようなリアルさがあり、無機質の金属から生み出されたとは思えない生命の力を宿している。そのインパクトは日本のみならず、海外への展開も期待される。（唐澤昌宏）

2017年度 受賞

シノダ タロウ
篠田 太郎

【肩書き】アーティスト、東京藝術大学准教授

【分　野】現代美術

1964年東京生まれ。造園を学んだ後に作家活動を開始する。一貫して人間と自然の関わりを深く問う作品は彫刻、ビデオ、インスタレーションと多岐にわたり、国際的に高い評価を受けている。「Lunar Refection TransmissionTechnique Performance」(シャルジャ、2016年)、シドニー・ビエンナーレ（2016年）など国際展にも多数参加している。

【選評】篠田太郎が言及する「もの派」は、関根伸夫が 1968 年に制作した「位相大地」から始まった。しかしこの作品の着想の深層に、関根が習った池坊の華道から導かれた池泉庭園の手法があることを知っている人は少ない。「位相大地」を現代版の日本庭園と見立てると、日本の伝統的な造園を学んだ篠田氏が「もの派」に反応したのは至極当然なことだと納得できる。
グローバル化した現代社会のなかで表現活動をする彼の作品には、人間を自然の一部と考えてきた、日本列島に継承する観想が確かに見受けられる。アートが氾濫する昨今、歴史的コンテクスにこだわる篠田太郎の制作姿勢は「創造する伝統」の評価に値する。商品化しにくい分野であるだけに今後の健闘を見守りたい。（山本豊津）

2017年度 受賞

ナグラ タツノリ
名倉 達了

【肩書き】彫刻・硯刻家

【分　野】彫刻、硯

硯匠の家庭に生まれ大学で彫刻を学ぶ。
東日本大震災によって甚大な被害を受けた、宮城県の雄勝硯復興プロジェクトへの参加を契機として、和硯の創作と向き合う。以後、硯と彫刻の形式や伝承技術、我が国の風土によって育まれた「余白」の空間性に着目し、現代を生きるための知覚や物質性を問う、新たな造形表現の創出に取り組む。
主な受賞に「日本工芸会奨励賞」、「SICF18藪前知子賞」などがある。

【選評】硯は、紙・筆・墨とともに文房四宝の1つとして知られ、書の文化を支える道具として大切に受け継がれるべきものである。しかし日本における制作・生産は、限られた人材 によって細々と続けられているのが現状で、このままでは歴史ある和硯の伝統が失われる恐れがある。大学で彫刻を学び、父より和硯制作の技を学んだ名倉達了は、伝統の技 を伝える貴重な人材でありながら、その発想は実に現代的で創造性に富む。墨池（海） と墨堂（丘）という硯の基本をおさえつつ、既成の枠組みに囚われない斬新なフォルムは、 まさに「創造する伝統」を具現化しており、新たな可能性を予感させる。和硯にスポット が当たることで、この分野の発展・展開にも寄与するものと期待される。（唐澤昌宏）

2018年度 受賞

モリモト アイコ
森本 愛子

【肩書き】美術家

【分　野】美術

1988年　神奈川県生まれ
2012年　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2014年　東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復日本画修士課程修了

【選評】森本愛子の作品は、絹本に天然顔料、染料、金銀泥、箔などを駆使したきわめて繊細な作品である。一見して「日本画」とカテゴライズされそうなものだが、本人はそれをよしとしないという。というのも「日本画」という概念は、明治時代以降、「洋画」の対概念として生まれたものであり、彼女は江戸時代以前の日本絵画、さらにはその母体となった中国絵画が有する農饒な表現を研究し、その成果を自作に応用しているのである。コンピュータによる下絵作リから始まり、動植物を子細に観察し、文様の構造を活かす手法は、作者の度重なる試行錯誤によって獲得されたものであり、きわめて結晶度の高い画面をつくりだしている。徹底的な古典の研究を新たな創造に活かそうとする姿勢は、まさにこの「創造する伝統賞」に相応しい。（山下裕二）

2019年度 受賞

タナベ チクウンサイ
田辺 竹雲斎

【肩書き】竹芸作家

【分　野】竹芸

1973年大阪堺市に三代田邊竹雲斎の次男として生まれる。
1999年東京藝術大学美術学部彫刻科を卒業後、父である三代田辺竹雲斎に師事。
国内外の個展・グループ展を中心に作品を発表。四代に亘る竹工芸の一家に育ち、初代から受け継がれる竹工芸の伝統技法や精神を受け継ぐ一方で、伝統工芸作品をコンセプチュアルな概念で制作する新たな方向性を見出す。フランス国立ギメ美術館やアメリカ・メトロポリタン美術館などで発表された竹の大型インスタレーションは現代様式としての可能性を秘め、アメリカ・ヨーロッパを中心に海外で高い評価を得ている。

【選評】ここ数年、私は田辺竹雲斎が手がけてきた、美術館などにおける壮大なスケールのインスタレーション作品に注目しきた。本来、「用の美」に供する物として継承されてきた竹工芸を、コンテンポラリー・アートの文脈でとらえなおし、いわゆる「伝統工芸」の範疇にとどまらない展開を目指している姿勢を高く評価したい。その活躍は国内にとどまらず、ニューヨークのメトロポリタン美術館をはじめとして、広く海外でも旺盛な発表を続けている。彼は、明治時代以来、竹工芸を継承する田辺家の四代目。その家訓は「伝統とは挑戦なり」だという。その通り。「創造する伝統賞」にもっとも相応しい表現者である。（山下裕二）

2021年度 受賞

サトウ ユウイチロウ
佐藤 裕一郎

【肩書き】画家

【分　野】絵画

1979年山形生まれ。東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻日本画領域修了。文化庁新進芸術家海外研修を機に2017年より制作の本拠をフィンランドに置き、国内外で活動する。

【選評】日本画科出身という、ともすれば保守的な立ち位置／表現になってしまいかねない制作姿勢を、フィンランドへの移住によって見事に昇華させた凄まじい世界観の構築の成功には睦目せざるを得ない。海外に おける日本画材料入手の困難さから現地にても調達可能な画材をもって、不利であったであろうその状況を見事に逆転し、斯くなる美しさを生み出せる力量は日本画だ洋画だ油画だアクリルだ鉛筆だ、或いは近代だ現代だといった表現領域のカテゴライズすら陳腐化する圧倒的なものではないか。こうしたカ 強さと精緻さを兼ね備えた美術家が日本の表現を牽引していく未来を見てみたい、そんな思いを想起させる表現者はそう居るものではない。（池内務）

2021年度 受賞

ナカガワ シュウジ
中川 周士

【肩書き】中川木工芸 比良工房　主宰

【分　野】木工芸

1968年京都市生まれ。1992年京都精華大学立体造形卒業、同時に父 中川清司 重要無形文化財保持者（人間国宝）に師事、木桶の制作技法、指物、刳りもの等の木工技術を学ぶ、同時に現代アートの活動も開始、個展、コンクール展などに出品、入賞多数、伝統工芸職人と現代アーティストの２つの活動を続ける。2003年滋賀県大津市に自身の工房、中川木工芸比良工房を開き木工に専念、2010年ドンペリニヨンの公式シャンパンクーラーを製作、それを機に木桶の新しい可能性を模索を始める。国内外のデザイナー、アーテイストとのコラボ作品の制作、海外での展覧会等への出品を開始、若手育成にも積極的に取り組んでいる。

【選評】日本の伝統工芸の中で木工芸という一見地味に捉えられがちな分野において、卓越した技術を伝承しなが らも既成の枠にとらわれず、革新的なものづくりに挑戦している。これは自己鍛錬を怠らず、真摯に木という素材と向き合うことで成し得た結果であり、彼の身体に刻まれた記憶の産物である。最近では国際的視野を取り入れ、日本の工芸を世界に向けて発信し続けている。特に、国内外のデザイナーをはじめ世界的アーティスト、若手工芸士の育成等その活動範囲は拡がる一方である。日本の伝統工芸一役を担う存在として、今後にもきたしたい。（大野木啓人）

2022年度 受賞

サカイ　ナオキ
坂井 直樹

【肩書き】金属造形作家・東北芸術工科大学准教授

【分　野】金属工芸

1973年群馬県生まれ。2003年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程鍛金研究領域修了 博士学位取得。2005〜08年金沢卯辰山工芸工房にて技術研修。2013〜18年同工房専門員を経て、2019年より東北芸術工科大学にて指導にあたる。「用」と「美」の視点から制作を追求し、現代空間に調和する工芸作品を展開している。
2003年野村美術賞、2012年美術工藝振興佐藤基金淡水翁賞、2016年テーブルウェア大賞　大賞・経済産業大臣賞、2017年日本伝統工芸金工展朝日新聞社賞、2018年ドイツベルリンフンボルトフォーラム茶室デザインコンペ最優秀賞など多数受賞。

【選評】金属を素材に伝統的な技法や感性を礎にして、現代の生活に即したモノづくりに挑戦してきた。金属には「重く冷たい」や「錆びる」というイメージもあるが、育んできた手法を駆使し、端正なフォルムに美しい経年の妙を纏う作品を生み出す。作品には、鉄瓶と瓶掛、茶釜と風炉といった古典からの着想もある。しかし、シンプルな中にモダンさと機能美を有する姿には、いまの時代にしかない魅力とともに品格もそなわっている。それはまさに、現代の工芸／クラフトが、アートとプロダクトの融合から成り立っていることを教えてくれている。伝統工芸は日々の創造性・革新性によって新たな歴史をつくる。坂井氏の活動は、今後さらなる広がりが期待される。（唐澤昌宏）

2023年度 受賞

ホンマ　ケンジ
本間 健司

【肩書き】木漆芸家

【分　野】工芸

1974 漆芸家・本間幸夫の次男として東京に生まれる
1997 石川県山中町にて辻英芳に師事し、木工轆轤を学ぶ。石川県挽物轆轤研修所に入所
2000 同所卒業後、漆液生産地である茨城県常陸大宮市に移住。父・本間幸夫が主催する漆工芸荻房に入り、漆芸、木工轆轤、漆林の植栽や育林を手がける
2008 岩手県二戸市浄法寺町にて日本うるし掻き技術保存会の長期研修に参加。佐藤春雄に指導を受ける
2020 独立。
20 年以上の下積みで培った技術や経験を活かして個人活動を開始。ウルシの木を植えることから始め、その命である樹液や材を使い、作品を制作

【選評】ウルシの木を育て、樹液を採取し、採り終えた木を伐採して木地をつくり、漆を塗る。これら一連の工程を一人で行い、作品を制作するつくり手は他に類を見ない。いずれも長い時間のサイクルの中で根気も必要であり、単なるSDGsとは一線を画す。木工と漆芸の両方の技術・技法を巧みにこなす木漆芸家として、木をよみ、木を割り、その肌合いを生かし、そこに自身で掻いた漆を塗って、独自の作品を生み出す。素材や道具の枯渇、後継者の不足など、将来の展望が見定めにくい日本のものづくりの環境において、ストーリー性という新たなコンセプトを取り込んだ姿勢と作品は、世界からも注目されている。日本の伝統工芸の新たな一役を示す存在として、今後の活躍が期待される。（唐澤昌宏 ）

2024年度 受賞

サトウシズエ
佐藤 静恵

【肩書き】ガラス工芸作家

【分　野】ガラス工芸

1983年 埼玉県生まれ。2006年に多摩美術大学美術学部工芸学科ガラス専攻を卒業後、中学校美術教諭などを経て大学院に進学し、シドニー大学シドニーカレッジオブアート スタジオアートコース（オーストラリア）に留学。滞在中、日本と欧米におけるガラス造形の違いに興味を持ったことをきっかけに、現代工芸の研究を行う。2015年に筑波大学大学院 人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻を修了後、ガラス工房に勤務しながら技法研究を続け、現在の制作スタイルに至る。金沢卯辰山工芸工房における研修を経て、2023年より金沢星稜大学人間科学部の講師を務めながら精力的に制作・発表活動を行う。2024年４月に東京藝術大学大学院に進学し、現在博士号取得を目指している。

【選評】如何なる創作活動においても、その最も重要な評価基準は「独自性」であろう。殊に如何にして作られたかわからない作品の独自性はまずもって強力である。佐藤静恵のガラス作品にはその力があり、その一方でガラスでなければ出来ない表現であろう事も垣間見せる巧さがある。また、佐藤の論文や留学の活動等から見られる、地理的、歴史的見地からも自身を分析する客観性は、作品同様に評価されるべきであろう。そうした裏付けから、過去作から現在の作品への変化には正しい進化と反省を感じる事ができる。制作に拘泥するだけではなく、自身の様々な活動の統合は、後進の表現者達の指針となるであろう正確さ、丁寧さを兼ね備えている。それはまさに創造と伝統のあるべき一つの姿なのではなかろうか。（池内　務）